

次郎長

次郎長翁を知る会
会報 第22号
平成20年3月31日発行
発行所 〒424-0821
静岡市清水区相生町6-17
(財)静岡観光コンベンション協会
清水事務所内
TEL (054) 352-7331
発行人 竹内 宏
編集人 田口 英爾
印刷所 ㈱ニシガイ
TEL (054) 352-2188

次郎長 フォーラム いまその人を問う

次郎長翁を知る会の創立十五周年を記念し、「次郎長フォーラム」が平成十九年十二月三日、清水テルサで開かれた。本号は、その日会場を沸かせたパネルディスカッション「いま次郎長を問う」の全容を十六頁にわたって特集した。



左から秋岡榮子、小和田哲男、宝井馬琴、竹内宏、村松友視、山本一力の諸氏。

●パネリスト(五十音順)

小和田哲男 静岡大学教授

宝井馬琴 講談師

竹内宏 静岡総研理事長

村松友視 作家

山本一力 作家

●コーディネーター

秋岡 榮子 エッセイスト

秋岡 きょうは五人のパネリストの皆様方に次郎長をめぐっていろいろお話をいただくわけですが、ぜひ会場の皆様にも六人目のパネリストとして、きょういろんな意見が出ると思います。

賛成、ちょっと違うんじゃないかなっていろいろあると思うんですけども、ぜひこは「よく言ってくれた」というときは、ひとつ皆様大きな拍手でぜひ一緒に参加をしていただきたいと思います。

そこで、まずそれぞれの先生方がどんなふうにか次郎長のことを見てらっしゃるのかということ、同じ質問を五人の方にさせていただいて、それにお手元に大きな画用紙とマジックを御用意いただいていますので、丸だとか、あるいはこう思うというのを書いていただいて、皆様の方にお示しいただきながら、同じ質問で、それぞれ違ったお答えをお聞きしたいというふうに思っています。

ですので、パネリストの先生方がばつと〇とか×とか何って見せたときに、「あつそうだ賛成だ」と思った方は、ぜひうなずくだけではなくて、大きな拍手で賛成だぞという参加をして、六人目のパネリストとしてこの会を盛り上げていただきたいと思います。

それではまず最初の質問です。よろしいですか、〇か×かでお答えください。「私は次郎長が好きだ」、はい、お願いします。

では皆様方、一斉にお答えをお出しくささい。

あつ、皆さん、どうぞ村松先生が二重丸ですので、村松先生に盛大な拍手をお願いします。(拍手)

それでは二番目です。次郎長一家で私はこの人が好きだ、あるいは私は生まれ変わった次郎長一家のこの人になって、次郎長にちよつと意見をしたい、どちらでも結構です。次郎長一家のどれが好きだ、あるいは私はこの人に生まれ変わって、

次郎長にちょっと言ってやりたいことがある、ぜひ一言お書きください。

では小和田先生からお願いします。石松、ほんどが知らない？

小和田 いやいや、石松しかほとんど知らないというような意味です。

秋岡 先生の石松のイメージってどういう感じですか。

小和田 子供のころ、いろんな講談なんか聞いてまして、「寿司食いねえ」っていうせりふだけはよく聞いたもので、その印象が強いですね。

秋岡 馬琴師匠のお答えをお願いします。

宝井 私は追分三五郎を。(拍手)二十八人衆の中でただ一人の侍上がりで、長脇差しで、インテリゲンチヤですから、そんな点でいろいろなオピニオンを次郎長に結構しているんじゃないかなと思ったりしております。昔映画で小泉博さんの名

武士を嫌ってやくざになつたい男

秋岡 ちなみに私は銀行時代、竹内宏さんの部下として二十年お仕えてまいりました。

それでは村松先生お願いします。追分三五郎。これは馬琴師匠と同じお答えですか。

村松 そうなんですけれども、僕子供のころに育った八幡神社の境内とか、八千代橋とかあいうところだ次郎長ごっこというのをやって、そのときに大政とか小政とか石松とか次郎長とか、人気があるんですけれども、僕はそのとき武士を嫌ってやくざになって、役者みたいな男な

演技がいまだに忘れません、本当に。子供のときの印象が強烈でございまして、それが一番今の思い出になっております。侍上がりのインテリやくざ、追分三五郎が大好きです。(拍手)

秋岡 じゃ清水が生んだエコノミストの竹内宏さん、お願いします。何て書いてあるんですか。

「同じ。」あつ皆一様に同じ。皆というのがカタカナだったんですね。

竹内 サラリーマン長くやりましたのでね、人のことを好き嫌い言っちゃだめだ。皆同じ。(笑)秋岡 じゃ竹内さん、もう一つお伺いしたいんですが、サラリーマンとして次郎長は見えやすい上司だと思いますか。

竹内 やっぱり仕えにくいでしょうね。だけど、人前で叱るなど、怒らなかつた。陰で怒つたという人ですから、そういう意味で、いかにも巧みな上司であつた。

なんていうのでね、これが気に入って、それで追分三五郎って、ずっと追分三五郎をやっていたら、そしたら、二十八人衆の中で追分三五郎だけが実在しない人物なんですよ。

だから結局次郎長さんに言つてあげたい。追分の三五郎が何か言つてあげたいわけないんだけど、だげど次郎長さんもだんだん、何というかいろんな次郎長像があつて、フィクションとして大きくなっていくわけだから、初めからフィクションの先輩ですからね、追分の三五郎が。だからフィク

ションとしての磨き方を追分三五郎は親分に教えるんじゃないかなという。(拍手)

秋岡 ありがとうございます。それでは山本先生、お願いします。(笑)何か期せずして両端が石松になりましたけど。

山本 例の『背負い富士』を書きます前に、この清水の方をずっといろいろ取材をさせていただいたんです。

この石松の在所といいましうか、森町にも行きてまして、森町には町役場があつて、その町役場の広報の係長が、生きていたら石松じゃないかというううな、そういう感じの方だったんです。お話を伺つたら、そのときに周りと合併の話が持ち上がったんだそうです。

ところが、結果的に森町が下りる形といいましうか、うまくいなくて、一つだけ残つた。で、周りの合併を進めていたところは、「しょうがないよ、あそこはみんな石松みたいなやつばかりいるんだから」と言つて破談になつたということです。

それがえらくうれしうだったんです。

その印象というのが大変に強くて、それと私なんかの世代ではといいましうか、もう子供の時は虎造さんのあの浪花節で「流れも清き太田川」というのが、もうずっと聞いて育つてきた時代だったものですから、その太田川も見ることができて、もうとにかく一遍で好きになつたというのが石松さんと書かせていただいた理由です。(拍手)

いち押しは、咸臨丸から山田長政まで

秋岡 きょうは期せずしてサラリーマン出身の竹内宏さんを除いては、石松と追分三五郎の二票ずつになりましたけれども、皆様はいかがでしたでしょうか。

それでは三つ目の質問です。先ほど馬琴師匠の講談の中では、咸臨丸事件ですとか、山岡鉄舟の出会い、出てきましたけれども、皆様が次郎長、いろんなエピソードを持っていると思うんですが、もし一つだけ何かを紹介してくださいといったらときに、おれは、私は次郎長だったからこのエピソードをぜひ伝えたいという一番好きなエピソードを一つ、ちょっと難しいかもしれませんがね、お書きいただきたいと思います。それではお願いします。

おそろいになりましたでしょうか。今度は馬琴師匠からお話を伺ってみたいと思います。

宝井 やっぱりさつきやったから言うわけじゃないんですが、私は咸臨丸事件というのは、次郎長



宝井 馬琴 氏

が新たな旅立ち、明治維新に第一歩生まれ変わって、ただ単なるやくざでない、それで近代人になって、企業家になって、また篤志家になるという、やっぱり一番何回やつても描きたい、そんな感じであります。(拍手)

秋岡 ありがとうございます。竹内さん、お願いします。「石油」今何か随分原油も値段が上がっていますけど、それはどういうことでしょうか。

竹内 相良の油田開発ですね。山岡鉄舟と一緒に明治十一年頃だったかな、幕末にカリフォルニアで油田が発見されて、明治の初めにスタンフォードの会社ができまして、アメリカはエネルギー革命があったんですね、鯨油から石油への。

多分清水には捕鯨船が来なくなって、アメリカの船がその結果来なくなって、次郎長は何となくエネルギー革命が世界的にあったんじゃないかというふうに直感して、どうも一緒に掘ったらしいというふうな感じがするわけであります。

現在も相良に行きますと、油田がちよろちよろ出て、においだけしてますけども、その意欲たるや、非常に結構だ。そのとき日本にとどまらず、アラブで掘っていくれば、我々は現在大金持ちになっていた、そのように思います。(拍手)

秋岡 ありがとうございます。そしたら、もしかしたら清水だけきょうからタクシー代値上げなんていうのはなかったかもしれません。

竹内 そうですね、ちょうどアブダビのように、

夢のような都市になっていたと思います。独立した方がよかったかもわかりませんね。興津川からこっちへ。(笑)

秋岡 村松先生、お願いします。「サイコロ」というお答えです。

村松 これ僕のおじいさん(村松梢風)ぐらいになると、清水に縁のある人だと、波止場で昔次郎長さんに会ったという人をまだ知っているような世代で、おじいさんのころに、七十四歳で亡くなったんですけれども、その最晩年のころに、子供にすごく優しくして、子供こっち来いみたいな感じで遊ばせて、そのときに何かそつといいことを教えてやろうかと言って、茶わんの中にサイコロを入れて、ちよりちより、ちよりちよりとやって、ぱつとやって見せたという話を聞いたんですよ。

それで僕は、それは博打打ちの尾底骨みたいなふうにとつていたんですけれども、ずっと明治元年というすごい激動のときを乗り越えたり、それからその前の二十何年間も切った張ったの世界で、そういう時代と、それから自分の世界の中で、あらゆることを切り抜けていくときのサイコロというか、博打というもののセンスですよね。

壺の中を読むというセンスがものすごい。見えないものを読むわけだから、だから時代という空気をすごく読む、それが次郎長のほかの侠客なんかにはもちろんないし、それからほかのその当時の同時代を共有した人たちにもなかったすごいセンスだと思います。壺を振るような感じで、ものすごく早く、さつと読み切ったという感じがあるんですね。

だから晩年に子供に優しくそうやって悪い遊びを教えたという部分に、にやっと笑うような感じのいたずら心が見えるんですけど、でもやっぱりそれはもしかしたら次郎長という人の芯にある一つの価値かもしれないと僕は思っ、サイコロと書いたんです。(拍手)

秋岡 では山本先生、お願いします。「浜松行き」、どういうことですか。

山本 次郎長は十五歳の時、育ての親のお金を持ち出して、浜松へ行き米相場を張りました。それは自分で、つまり借金はちゃんと自分で返してますね、相場で大もうけをしたという。

今の村松さんのお話を聞いてて、自分でも一回納得したんですけども、結局その相場で何かを当てるというの、それから博打というのは、本当にその人間の素が出ますよね。

私も長らくサラリーマンをやっていて、嫌な上司に無理やり誘われて、やりたくもないマージャンを朝まで付き合っただけというのは何度もあって、もう「いつまでやるんですか」と言ったら、「おれが勝つまでだ」と言われて、こんなやつの下で働くもんかと思っただけでも、次郎長さんというの、きつと優しさを何か表現するためには、自分に力がないと表現できないじゃないですか。だれかが頼ってきたときに、「いいよ、おれに任しておけよ」と言うためには、任せろと言う人になんて任せようがない。

昔、植木等さんの歌で「金がないやつはおれのところへ来い、おれもないけども」という歌があったんだけど、何か人っていうのは、寄って

立つ相手に自分がないものを求めるがゆえに、人が集まってくっていくことは、これはもう昔からの人の常だと思っています。

立っているだけで、そこに次郎長がいるということでは人が集まっていたのはなぜなのかなということとをずっと自分で思い描きながら『背負い富士』を書いたんですけども、行き着いた答えというの、やはり自分で言わなくても周りが言ってくれる存在だったんだろうな。じゃそれがなぜそうなのかと言え、やはり次郎長さんに頼っていけばどういかなると、人がどこか思っ

先ほど馬琴師匠の名調子伺いながら、ああやっぱりそういうところがあるから漁師にしても、親分に何か頼んでみようかなという気になった。そういう次郎長が今でもこうしてこれだけの人を集めて次郎長の会がやっていける源にあったのは、自分を博打でも何でもいい、力を信じて、先を見て、体を張って物を、人の力を頼らずに、自分の力で勝負をしていったということが、若いころからあったんだろうなと思うがゆえに、このエピソードにしました。(拍手)



小和田哲男 氏

秋岡 それでは小和田先生、お願いします。「山田長政顕彰」。

小和田 もう大分前でですけども、私山田長政の本を書いたときに、明治以降の山田長政がどのようにに世間に知られるようになったのかなということを追いかけていたときに、清水の次郎長が相撲興行ですね、これはきょう皆さんに配られている年表にもたしか明治二十五年あたりのところに入っていたと思いますが、それをやっているという事実につかつたときに、何だろうこれはというふうな、そんな感じを持ったんです。山田長政というのは、御承知のとおり、海外へ、いわゆる現在のタイですね、昔のアユタヤ、日本人町の頭領といましようか、そういう形になって、しかも最後はリゴールという地方の王様にまでなった。そういう人を次郎長が知って、それでやっぱり顕彰しようということで、だんだん、だから現在に近いのかな。つまり国際化時代を見据えて、次郎長自身も何か英語の塾といましようか、そういったのをやってもいますので、新しい時代を引っ張っていくような人は、そういう先覚者というものにやっぱり気がついてた。そんなところを私非常に魅力に思っているんで、山田長政顕彰碑に相撲興行で応援をしたというエピソードを入れておきました。(拍手)

秋岡 実はこういう質問を五つさせていただきましたというのを打ち合わせのときに先生方に申し上げてはあるんですけども、決して、じゃ私は何にします、私は何にしますと打ち合わせをしていません。きょう皆さんこの場で初めて御披露いた

だったの、それにもかかわらず五人のパネリストの先生方が皆さん違ったことをお書きくださるというのは、やはりそれだけ次郎長の生涯が多彩で、また魅力に満ちた人物だったのかなと、そんな気がいたします。

それでは四つ目の質問に入ります。

もう風物詩になっていますが、京都の有名なお寺の御住職が、毎年漢字一文字で世相をあらわすというのがあります。きょうは先生方に一文字という指定は外させていただきますが、漢字だけで

天性の勘と敏、時代と人のツボを読む

竹内 次郎長は本当にうまいんですね。封建時代、幕藩体制のもとで成功し、資本主義のもとで成功し、しかもレジャー産業とか、賭博産業とか、同じものをやって、しかも賭博も繁盛したということとは、このごろの言葉で言うところのコンプレックス、ルールが極めてはつきりしていたという点があったと思いますけれども、それからさらに何と言いますか総合サービス業といいますが、そういうものもやって、警備保障をやったわけですね、徳川時代の。彼は警備保障の発祥だと思えますけれども、それからさつき杉山公一（清水商工会議所会頭）さん言われたようにお茶輸出のための船を横浜へ運びまして航路をつくりました。お茶は直接輸出して、ここで相場を立てないと抜かれちゃうんですね。

だから封建時代の幕藩体制から資本主義になっても同じようにうまくやったというのは、とてつ

もいいですし、ひらがなが混じってもいいんですが、次郎長を一言であらわすとしたら何でしょうか。これまた五人の先生方、それぞれのお答えが出ると思います。お願いします。

それでは、会場の皆さんも私だったらこの一文字というのを、ぜひお心の中でちよつと思いついてみてください。字数が多い人、少ない人いろいろですので、多分違う字が書いてあるんじゃないかなと思います。それでは竹内さんからお願います。「勘」ですね。

もない人材だったという感じがします。彼が清水に生まれなくて、ローマとかロンドンとか、そんなところに生まれていたら、ものすごく大成功して世界を制覇していたんじゃないか、こういうふうに思うわけがあります。（拍手）

秋岡 今ロンドンというお話ありましたけれども、そのころマルクスがあつちではいたんですね、ヨーロッパでは。

竹内 ちょうど次郎長が活躍したころ、マルクスが慶応の初めですね、資本論を書いていた。（一八六七）

秋岡 何か次郎長とマルクスが同じ時代に地球にいたというのは、すごい不思議な気がするんですけど、地球は大きいですね。

じゃ村松先生、お願いします。「敏」。先生それは「びん」と読むんですか。

村松 今ローマ、ロンドン、マルクスという学問

的な下りの前までの竹内さんのあげた全部の理由を早くやると、俊敏の「敏」ですよ。それが非常にこう何というか、類いまれなセンスだと思えますね。

つまり、例えばさっきの馬琴師匠の山岡鉄舟と初めて会うわけですね、そのとき。で山岡鉄舟という人にぱつと会ったときに、この人の前で変に礼儀だけ正して、気後れしたような言葉を出しているよりも、そこへずけつと自分のどすを突き付けるような言葉を言った方が、絶対に相手には気に入られるという、すごいこの人の何というか懐の深さみたいなものを瞬間的に察知するというのかな。

それが僕は多分旅を転々としていたときに、要するに清水の人というけれども、結局二十代後半から活躍するような時期ですね、二十年ぐらいの間というのは、大体旅の人なんです。旅に行つて、いろんな人のところへ寄宿して、そしてその人たちの知遇を得て、そしてその人たちのエキスをもらって、そしてふるさとの清水に帰ってきては、またお上ににらまれて、また旅に行くという。

そういうことの繰り返しの中で、何かさつき、例えばさっきの鉄舟さんに対する態度なんかは、清水に生まれて、清水に育っている人というのは、清水のローカル性というのは見えないわけですね。だけど、旅に行つて清水というところを見ると、その清水のローカル性のすごさというのか、そういうことがよく見えたんだと思うんですよ。ですからそのローカル性を使って、インテリを

転がすというか、インテリ殺しみたいなところがありますね。だからそういう天田五郎なんという『東海遊俠伝』の作者なんかも、要するにああいう文学青年というのをころっとさせるというか、そういうことがものすごい俊敏に行われる。だから相手はそれを計算だと思わないし、もと

闇を見通す「目」、人との出会い「遇」

秋岡 山本先生、お願いします。それは「め」もく。

山本 「目（め）」です、これは。先ほどの馬琴師匠の一席で大変よくわかりましたね、どんな顔だかが。眉がくっついていて、目が引つ込んでいる。これね、次郎長さんはあらゆる意味において目がよかつたんだと強く思います。

それは目がいいというのは、遠くが見えるとか、物がよく見えるという言い方もあるんですけども、やはりもっと大きな意味で、見通す力というのが、やはり目から情報が入っていった、それを判断するんだらうなと思うんですよ。

今、村松さんおっしゃった若いころ旅をしている、本当にそうだと思う。で、きょう私ここへ来るのに掛川から在来線に乗ってきたね、約五十分。浜松というのは、それよりまだ先ですね。そうすると、やはりこの清水から、例えば西へ向かって浜松まで出ていくというのは、十分大きな旅であつたらうなと思います。

私は東京の江東区という下町と言われるところに暮らしているんですが、夜は明るいんです。と

もと自分がそういうことを考えていた、そういう立場の人間であるというふうに思い込んで、同士だと思ってしまうというか、そういう何か早わざを感じるんですよ。それが何か生涯の次郎長の武器だったんじゃないかという気がします。で「敏」。

にかくもう真つ暗な夜というのを体験することは都会ではなかなかできません。きのう泊まったヤマハのつま恋という施設を夜歩きながら、全く明かりのないところを何百メートルも林の中のようなところを歩いたんです。もう空には冬の星座が散っていて、本当に星が大きかった。

でもきのう見たあの掛川の暗さというのは、次郎長さんが活躍をしていたころの夜に比べれば、昼間のような明るさかもしれない。本当に夜の闇が深ければ、その反対側にある星の明かりというのは大きくて、はつきり見えます。

次郎長さん、きつと旅枕の中で夜空を見上げて星を見て、その星の大きさと瞬きの加減と闇の深さと、いろんなものを自分の中に取り込んでいくことで、その反対側にある明るい社会だとか、日の当たっている昼間の明るさだとか、もつと言え日本がこの先に何を迎えるようとしているのか、それらのことを見通す目というものをきつと養つたに違いない。養つたがゆえに目が窪んだんです、きつと。（笑）

秋岡 じゃ小和田先生お願いします。これは？

小和田 私は「遇」という字ですね。これは先ほどから馬琴師匠の話にも出てきましたし、村松さんの話にも出てきましたが、二字で書けば「知遇」。やっぱり次郎長さんの一生を追いかけていくと、きょう馬琴師匠の講談でもありましたように、鉄舟との出会いというのが、その後の一生を決めたのかなと。

歴史家ですから余り「もしも」ということは言っちゃいけないんですけども、もし鉄舟との出会いがなければ、単なる一親分で終わっちゃったんじゃないかなんていうことを考えますと、やはりそこで山岡鉄舟というすごい人物と出会ったということが、その後の次郎長の一生を別な世界、先ほど竹内さんからも話が あつたような、その封建制の時代から近代に適応できるような、そういう転身も図ることができたのは、やはり出会いではないかな。そういった意味では、「遇」という字は一番びつたりかなということ、挙げさせていただきます。（拍手）

秋岡 それでは馬琴師匠お願いします。

宝井 私は仁義の「仁」でございしますが、「仁」というのは思いやりという意味があります。

ですから私はこの次郎長を今日売り出すようにした三代目神田伯山という有名な講談家の名前は断じて忘れることはできません。この伯山という人は、私は直接は知らないんですが、私の師匠、先代馬琴はよく御存じでした。

楽屋で会つても、何か「おはようございます」と言つても、微塵も隙のない人で、それから弟子が大勢いたんだけど、とにかく猫一匹そこに

いても「小言言うなよ」というような人だったと聞いております。

この伯山という人は売れに売れて「八丁荒らし」と言いましてね、その伯山さんが寄席に出ると、周り八丁の寄席がみんながらになっちゃうというんですよ。落語であろうが、義太夫であろうが、何やろうがだめだったですね。しかもまたそのお座敷で政府のお偉方とか財界人でお金をたくさん出して話をお聞きという席には絶対行かない。寄席の客を本当に大事にした人ですね、伯山という人は。

例えば古今亭今輔という落語家がおりました、今輔師匠から聞きまして、いやあ、伯山さんが寄席のトリやるって、我々は若い衆は万歳ってみんなで言ったもんだって。別に金離れがいいだけではなくて、何か思いやりに包まれたすばらしい人だったと。

例えば角帯をしましてね、「先生いい帯でございますね」「ほしいかい」「いいですね」「そうか」というので、はさみを貸してくれと言って半分切って寄越したというんだよ。(笑)

それからお金を借りるときは、例えば二人つきりているときは、なかなか「うん」と言わない。大勢見ている人がいると、「おおそうか、持っていけ」なんてやったらしい。だからいろいろまた表も裏もあればあるというんでしょうけれども、思いやりに貫かれていた人だと思っております。

この伯山という人は最初、荒神山のけんかについていった、松廻家太琉という講談家がおりました。そのころは従軍記者みたいに講談家がついて

いたんですね。そのけんかの一部始終を見て、後で一席やるという、その松廻家太琉からネタを受けたんですよ。それはもちろん村松さんもさっきおっしゃった天田愚庵の『東海遊俠伝』がベースになっておりまして、それで売れに売れた。

ですから私思うんですがね、声で、そして舞台で次郎長を売れるようにしたというのは、虎造と神田伯山なんですよ。それから、また元を書いた天田愚庵。

だから講談だけじゃだめなんです。やっぱりね、おもしろいもので、三段階に分かれておりまして、次郎長を、あるいはまた国定忠治を有名にした最初は講談が始まります。国定忠治と『天保水滸伝』は三代目の宝井馬琴が書いた。それから次郎長は神田伯山が書いた。

それからその後、浪花節がないとだめなんです。国定忠治は『赤城の子守歌』の春日井梅鷺という人がやって、これまた売れた。それから『天保水滸伝』の方は笹川の繁蔵、飯岡助五郎は、玉川勝太郎という人が、「利根の川風たもとに入れて、月にさおさす高瀬舟」で、これを売った。

でこれだけでは全国制覇はできないんです。その後に歌謡曲が出なきゃだめなんです。(笑)『旅姿三人男』、ディック・ミネが歌わないとだめなんだ、これ。それからあと『赤城の子守歌』も東海林太郎が歌わなかったらだめなんです。それから『天保水滸伝』も田畑義夫の『大利根月夜』がなきゃだめだった。

だから一番最初の偉いのは講談だった、それを言いたかったんです。(拍手)

伝えたい文化 伝えたい心。



水口屋 みなぐちや

江戸時代には、興津脇本陣として、明治・大正・昭和期には、別荘旅館として全国に名を馳せ、西園寺公望等も愛用した、一碧楼水口屋。鈴与グループでは、約400年続いた宿屋の歴史を後世に伝えるべく、フェルケール博物館に寄贈されていた研究資料を「水口屋ギャラリー」として一般に公開しています。



鈴与株式会社

〒424-8703
静岡県静岡市清水区入船町11-1
TEL.(054)354-3054 www.suzuyo.co.jp

清水みなとの新・東海遊侠伝・上海編を

秋岡 次郎長を一字で書きいただくのでも、「遇」「仁」「勘」「敏」「目」と、随分さまざまな漢字が出てきました。

それでは最後の質問です。きょうの次郎長フォーラムのテーマは「いま次郎長を問う」という題になっています。この「いま」というところでパネリストの皆様方に伺いたいと思います。

もし今の時代に次郎長が生きていたら、どんな職業に就いてもらいたいですか。あるいは今生きている人でだれが次郎長に一番近いですか。いろいろな職業ありますよね。政治家もありますし、経済キャスターもありますし、経営者というのもありますし、清水商工会議所の会頭というのもあるかもしれませんけれども、そういうことも含めて、今次郎長が生きていたら、この人をこのポストにということパネリストの皆さんにお知恵を絞っていただきます。

今度は村松先生からお願いします。「自伝作家」。



村松 友視 氏

村松 次郎長というのは、硬派と軟派の次郎長がありまして、それで硬い方の筋で言うと、『東海遊侠伝』というものを軟派的に展開するという、娯楽的に展開するんじゃないかと、『東海遊侠伝』というものをものすごくまじめな、貴重なアウトローの歴史、幕末から明治に至る時期に生きた侠客のみずからを語るようなんですけれども、そういう歴史というのは田口さんなんかの本にもあるわけですから、そういう歴史を残した資料というのではないですね。

ですから次郎長を見るときに非常にもいろいろのは、一般的な時代の流れ、あるいは政局の流れ、あるいは文学者の歴史、そういうのをあらゆる年表を、今度は次郎長がそのとき何をしていたかというところにびしゃつと当てはめてみると、非常におもしろいものができるんですね。

それでその硬い方で言うと、今こまで、ほぼそういう筋道ができたと思うのは、『東海遊侠伝』のそういう資料としてのアウトローの世界の資料、それがその時代というもののの中に、つまり駿河という土地であるし、官軍が幕軍かというさつきお話がありましたけれども、要するに官軍なのか幕軍なのかが漠然としている。しかもその駿府のお膝元ですよ。

ですから、静岡あたりへ江戸から逃れてきた武士たちなんかも、結局もう一回江戸へ帰ることもあるかもしれないと思っているかもしれない。そ

れから土地の人には、江戸へもうじき帰ることにするんだよなんていうことを言っていたかもしれないですね。そういう中で幕軍と賊軍、官軍、そういうものがごちゃごちゃになっているような時代なんですね。

そういう中でアウトローの歴史というのは、まず書く人もいないし、それから田田五郎という人が偶然に山岡鉄舟のついでで次郎長のもとへ来なければ、それから次郎長にとってそういうものが何となく必要だという気配がなければ、でき上がらなかったことなんですね。ですから、そこからそういう幕末の時代をすごく意義づけるような要素があるというふうに、今次郎長が生きていたら、そのことにも直感的に気づくでしょうから、その部分を延長させていったような次郎長物語というのを一つつくると思うんですね。

それからもう一つは、今も司馬遼太郎さんなんかが登場して以来、戦後の時代劇というのは、次郎長映画があった時期というのは限られていると思うんですよ。ある時期でぶつとなくなっちゃったんですね。その時期に、例えば近藤勇中心の新選組も消えていくんですね。そして土方歳三、坂本龍馬という、そういう人たちが中心になっていく。

木枯紋次郎とか、国定忠治のようなアウトローはまだ残っていくんですけども、次郎長というのはやっぱり成功者の歴史だものですから、だからそこに何か六十年半ばから後半に向かつていく世の中の風ですね、激風みたいなものに合わないことがあって、そして何となく消えていったイ

メージが、山本一力さんがこの間復興させるまで、ずっと続いているわけです。ですからこの部分のおもしろさをもっと次郎長自身が語ることがあると思うんですね。

娯楽としても研ぎ澄まし、それからその思想として、自分のしゃべったことのある一俠客の記録の幕末における意義みたいなものも突き進めていって、その二つを合体させたような『新・東海遊侠伝』みたいな、『新・東海遊侠伝・上海編』みたいな、ディック・ミネから始まるという、そういうような感じのものを展開して、あんまり過去に閉じたという感じじゃなくて、やっぱりあの『旅姿三人男』をディック・ミネが歌ったところ、ところが、単なる演歌の中に押し込められない次郎長のしゃれさがあるんです。「見えぬ片目に出る涙」なんて、もうたまらないですね。

法の上の志を持った事務次官に

秋岡 山本先生、お願いします。「事務次官」。

(笑)

山本 何で事務次官かを言う前に、上海編は村松さん、書くしかないやね。(拍手) これはもう聞いていて、ぜひとも村松さんをお願いしたい。

じゃなぜ事務次官か。今のもうくそつたれ政治家どもを見ていて、一番思うんです。あの政治家であり、官僚でありという、この二つがお互いが拮抗して国のまっつりごとをやっていくときに、大臣というのはやはり有限ですから、どう代わっていくかわからない。しかし実際のまっつりごとの

だからあれをディック・ミネのあの節回し、しゃれたハイカラな次郎長というのも、その上加わるような気がするの、『新・東海遊侠伝・上海編』というものを期待したいと思います。(拍手)

秋岡 もし次郎長が今生きていてペンを握ったら、もしかしたら直木賞作家になれたかも。

村松 いや、そんなものは超えるんじゃないですか。そういうときね、多分次郎長というのは、これまでやったことある人は何人かいるけど、一人二人しかいないと思うんですけれども、すごくおりがたくお受けしてね、それで壇上へ行つて、「おれがこんなものもらうわけねえだろ」と言つて、賞状をぼんと捨てるといふ、そういうことやると大受けするといふか、爆発的に売れるということを知っているような作家だと思っんです。

根っこをつくっていくのは、これはやはり官僚側の事務次官であろうと思います。

そう考えたときに、次郎長さんがあの器量でもって、しかも酔いも甘いもどっちもわかつている事務次官になつてもらいたい。

で今世の中を見ていて、私大変嫌に思うのは、もうげんなりしてくるのは、みんなが一方向へ向かつて、今はやつている賞味期限切れ。

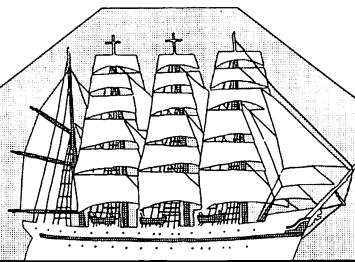
悪うございました、私もやりました、あれもやりましたのもう大会だ。

私なんかガキの時分、賞味期限なんてものは、

次郎長の後半生は
地域の発展に捧げられ
ました。



清水銀行も地域の
経済・文化・スポーツの
発展をお手伝いして
まいります。



清水銀行

世の中に存在してなかった。自分の舌と鼻が賞味期限をちゃんとかぎわけたんです。(拍手)

あんなことをやっていると何になるか。いっぱいまだ大丈夫なのを時間がきたから捨てるといふばかなことを始める。ことし私は昭和二十三年早生まれですから、仲間は二十二年生まれがほとんどです。ことし六十になって、物理的な制度の上の定年を迎えて、野に下る人間が随分います。

しかし、その人間たちが果たして能力がなくなつて腐っちゃったのか、そんなばかなわけない。もともと今の若造どもには及びもつかないような知恵をいっぱい持っていないながら、時間がきたからもうだめよと言われて、野に下っている人たちがいる。今我々が片方で、みんなで寄つてたかつてやっている賞味期限切れというやつは、そういうことをやっているんじゃないかと思えてなりません。

次郎長さんもし事務次官やっていたら何をやるか。法律というのは、人間が後知恵で物を考えていったことです。法的な責任よりも、道義的な責任を自分の行動を律していく者の上に置くん



山本 力氏

という生き方を次郎長さんが世の中に示してくれたら、これは法律が決めてないから政府だといふばかな判断をして、網の目をくぐつていこうとするようなやからをきつとどこかで一網打尽にしてくれる。

今本当に法律が何だからかんだからといって、どんなとん、どんなとん、次から次へと法律を毎日つくっている。その法律をつくっていくのは役人です。国会の議員が立法を独占しているといひながらも、実態はそうじゃない。役人の側から上がつていくものを国会がそれを後追いついていっているのが実態です。そのことから目をそむけちゃいけない。

だとしたら、法律をつくっていく人間のとつべんに座る事務次官がしっかりと志と人の心を持つていてくれれば、賞味期限というものは片方で大事かもしれない。しかしむだに捨てていくということの本当にやつていいのかどうか。

先ほどだつて我々聞かせてもらったじゃないですか、それと逆のことを。人の亡きがらを海に捨

外交官に、次郎長の国際感覚

秋岡 それでは小和田先生、お願いします。「外交官」。

小和田 「外交官」です。きょう皆さんの御手元に配られている年表にも、若干その片りんといひましようか、出ていると思うんですけれども、例えば明治十二年のところですね。米國前大統領格蘭ト將軍が清水に來たときに、投げ網のパ

てて、捨てたものは明らかにそれは人の亡きがら、ごみじゃない。それをわかつている次郎長さんは船を出して、手厚く亡きがらとしてそれを葬つた。ところがばかな役人どもは、それをごみとしてやつちやいかんと言っている。人の心がそこに存在しなければ、どんな時代を迎えてしまうか。先ほどの師匠が語つてくださったあの一席に集約されている。今そういう非常に怖い時代をすぐ後ろへ我々は背負っているんです。背負いたくもないものを背負っている。

そうじゃない。やらなきゃいけないのは、人の心を法律よりも先に持つていくように、その心でもつて法律をつくっていくということを我々が世の中に求めていくということを推し進める、そういう非常に大事な時代です。次郎長さんに私は本當にそのことを頼みたい。この後に続いてくる役人に、心のどこかに次郎長が示した「死んだら仏だ」、この言葉で政治がくくれていけるようになれば、きつと過ごしやすい時代が来る、そう思えてなりません。(拍手)

フォーマンスで接待をしたとかですね、そういうふうな形で、結構外國要人との關係ということもあつたりして、といひますのは、ちょうど次郎長の生きた時代、幕末維新期というのが、まさに日本が世界の仲間入りをするという時代です。よく開國の対句として鎖國という言い方しますけれども、確かに鎖國という形で、たしか志筑忠雄と

いう人が『鎖国論』なんていうのを書いてますので、鎖国があつたから開国ということになるんでしょうけども、厳密には本当に国を閉ざしちゃつたわけではなくて、中国とかオランダを通して、世界にはつながつてはいたんですけども、それが例のペリーの黒船以来、外国の圧力によって日本が開国、いわばさせられた。戸をこじ開けられたという感じなんですけれども、そのときにやっぱり外国のアメリカ、イギリス、オランダ、ロシア、とくにその四カ国の圧力が強くて、それで日本は相当下手に出ざるを得なかつたわけです。

そういつたときに、いわゆる欧米の生活様式がずかずかと日本の家庭にまで入つてきた。そこでかなり日本側はそのころ弱腰だつたものですから、それまでのいい日本の風習というのが、そこで今はやりの「欧米か!」というやつがありますけれども、それに近い形ですよね。鹿鳴館時代に代表

されるように、そういう外国の生活習慣に追い付け、追い越せという形でやつていった。

それはやはりその時代の私は日本の外交官が弱腰だつたからだと思つてゐるんですが、そういう点で、次郎長がもし外交官にそのころ抜てきされていれば、いやそんなことないよ、日本のいい風習は残すんだよということで、外国要人にもかなり自己主張できたんじゃないかな。

ひるがえつて今の外交官も私は同じだと思ひますね。あんまり大きい声では言えないんですが、私の小さいころの友達で外交官になつたのもいますが、やっぱりアメリカに頭が上がらない外交を今でもやつてゐる。それはだから次郎長のような人が、今外交官になつたら、もつと日本の主張がはつきり言えるんじゃないかということで、私はもし次郎長が生きていたら外交官にしたいなと思つてゐます。(拍手)

企業再生で子分たちの失業救済

秋岡 御参考までに申し上げますと、タカアンドトシの「欧米か!」というのは、今ちょっとブーム過ぎまして、今は「そんなの関係ねえオッパッピー」というのが一番はやつてゐます。馬琴師匠お願いします。

宝井 「講談家」にしたいですね。これは自分の一代記をフィクションなどを交えなくて、そっくりそのままおやりになつても、うならしちゃう、すばらしい宝井大馬琴になれること、請け合ひでございます。

ハートとか思いやりの、背筋をパーンと棒が一本貫くような、こういうものが講談の昔から三要素である、一に俗談平和を説き、二に座興の笑いを結び、三に猛勇の知弁をふるう、これが三つそろつて講談になるようでありますから、ぜひひとつ講釈師、講談家にしたいなと。

落語に比べて大分差をつけられてゐますものですから、ここはひとつ堂々と出ていただく。今、講談も構造不況業種になっております。鉄鋼、造船、セメント、講談というらしいんだよね。そんな

なこと言うんでもないやつがいる。だから、まあそんなことで次郎長、現代に來たりとお願いをする次第であります。(拍手)

秋岡 最後にになりましたけれども、竹内さん、お願いします。「厚生労働省」。

竹内 次郎長が新政府に命じられ、清水の警護役になつて、徳川を裏切るわけですね。このときは堪らなかつたんじゃないかと思ひます。なぜ裏切つたかといえば、子分の二十八人がいたからです。彼らの就職のことを考えて、そうしたに違ひない。ほかの博徒を見ますと、博徒が一番集まつていたのは三河だと言われていますね。これは小藩分立で旗本の知行地がたくさんありますから。そこで逃げ込んでいて、尾張が一番最初に寝返つて、それから戊辰戦争に出兵させられるわけですね。ちようど越後なんかに出兵したのがそれです。

それで帰つてきたら、皆要らなくなつちゃうんですね、廢藩置県で一時的に与えられますけれども、それで使い捨てられて反抗したら皆殺しと。奇兵隊も同じ運命にあつたわけですね。今の新しいチルドレンもそうかなという感じがいたしますけれども、多分二十八人衆も首になつて、戦争に参加して、長岡戦争かなんかに参加して、待遇をちゃんと受けなかつたから、自由民権運動をやつて、一網打尽になつてやられちゃつたんじゃないかな。これを次郎長はまず防いで、企業再生をして、失業を救済した。これはまさに厚生労働省のやるべきことだと思ひます。

それから富士山を開墾した。このとき囚人を使つたわけですね。囚人は多分新しい時代になつ

たら、昔の囚人だったら、技能が身につかないから、これを多分使ったんじゃないか。彼は人材育成の名人だったというふうに思います。

それから清水に大勢徳川の本家が逃れてきますね、ここに三万とか四万の幕臣が移住してくるわけですね。そこで権力がはつきりしませんが、さっきの勤皇と幕府がはつきりしませんが、どっちについていいかわからんから、ちょうどこれは内戦状態にあったというふうに思います。ちょうどウガンダとかパレスチナとか、凄惨な内戦と同じような状態にあった中を、彼は難民を平穩に処理した。

移住者たちはお泊まりさんなんて言われているそうでありまだけれども、寺院に案配して、そして中にはお茶を開墾したとか、いろいろな職業訓練につないだという意味では、本当に歴史的に誇るべき業績をやったというふうに思います。パレスチナの人なんて見に来ればいいのかなという感じがするぐらい、すばらしい事業をやったと思います。

秋岡 竹内さん、次郎長さんにはぜひ経営者にもなっていたらいい、NOVAとかコムシンの再生とかもやっていただくと、厚労省マターとしてはよかったですね。きょうせつかく小和田先生にお越しいただいていますので、俯瞰的に山岡鉄舟や次郎長の時代、どんな時代だったのか。やさしくお話しいただければと思います。

小和田 家康から数えて十五代目将軍、徳川慶喜が例の、慶応三年に大政奉還を決断します。慶喜のときになって、だんだん、たがが緩んで

きたというか、規律もちょっと弱くなってきて、結局これ以上どうも將軍として維持できないという動きというか、慶喜自身思うようになった。そのときに徳川慶喜の側近の一人に西周（にしあまね）がフランスに留学したりして、向こうでのいろんな先進的な政治体制を勉強してきた。

それを徳川慶喜に御進講しまして、慶喜もそれはいいかもしれないということで動き出したのが、いわゆる大君制、これは要するに、それまでの將軍として日本を統括するのではなくて、將軍という職は一度離れるけれども、大君として日本を統括するんだという動きになりました。

これが明治維新への動きを加速するわけですね。つまり一度政権を朝廷にお返しして、改めていわゆる国民議会的なものの議長に大君がなるという構想だったわけですけども、それが結局うまくいかなくて、いわゆる王政復古の号令というのが出まして、慶喜は要するに薩長に対して戦いを挑むという形になります。

これがその翌年ですね、慶応四年、すなわち明治元年の一月の三日に有名な鳥羽伏見の戦いが起こりまして、結局そこで幕府軍が負けちゃう。

その一連の動きが明治元年、慶応四年イコール明治元年の干支が戊辰の年なものですから、一連の戦いを戊辰戦争と言っているわけです。

つまり官軍が薩長中心の、薩長だけではありませんで、そのころ、そうですね旧徳川幕府の諸藩、約二百八十藩ありますから、そのうちの幾つかはもう薩長側について、いわゆる官軍としての旗、錦の御旗を掲げていきますので、これが動きとし

キッチンと！

Hagoromo はごろもフーズ

100g
小分け

食べたい分だけ、
いつでも炊きたて！

パピッとライス

ホームページアドレス <http://www.hagoromofoods.co.jp/> ※パピッとは、はごろもフーズ（株）の登録商標です。



て急速な展開を遂げるということによりまして、先ほどの清水港での例の咸臨丸の話につながってくる。

これは幕府軍の方も、有名な彰義隊で、上野の彰義隊の戦いだとか、そういう官軍に対する抵抗も試みたりするわけですけども、一番大きな動きが先ほど講談の中で出てきました榎本武揚、これは勝海舟の下にいた海軍の人間なんですけれども、勝海舟の方は時代の先を見て、これはもう幕府としてはやっていけないし、新政府にある程度恭順の意を表した方が徳川家のためになるという動きをとったんですけれども、榎本武揚たちは、いや、そうじゃないと、幕府軍としての維持を最後まで見せなければということで、先ほどの話にありましたように、軍艦八隻を盗み出して、それに乗って東北を目指し、最終的には函館に行く、これが例の有名な函館戦争ということになるわけです。

その過程で、その中の軍艦の一隻、咸臨丸がちょうど暴風雨で大破して、清水港に来て、そこで修理しようと思ったところ、官軍の船に襲撃さ

れたというのが咸臨丸事件です。

したがって、この咸臨丸というのは、御承知の方多いと思いますが、勝海舟が乗って、初めて太平洋を渡ったというあの有名な船です。ですからその歴史的に有名な船に幕軍が乗って、そのまま行こうと思ったら、残念ながら遭難してしまったということから、先ほどの講談の話につながってくるわけですので、そういった意味ではちょうど幕末維新期のまさに激動の時代ですね。この京都、大阪、江戸、そして函館で、もう一つ清水という形での幾つかのポイント、ポイントがある。

もちろん戊辰戦争では皆さん御承知の、先ほどもちよつと話出てきました長岡城の戦い、これは越後ですね。新潟県の長岡市。それから例の会津白虎隊の戦い、そういった歴史的な戦いが数ある中で、この清水の港の次郎長の活躍もちょうどそのところで位置づけられるということになりますので、歴史の大きなうねりの中の次郎長というのが、そんな形になろうかと思っています。

なぜ次郎長は語り継がれるのか、黒潮つながり

秋岡 質問をさせていただきたいんですが、先ほどから村松先生とか山本先生から、次郎長は日本の先を見通す目があったとか、時代の空気を感じるセンスがあったというお話があります。

今の先生のお話を伺っていても、大変な激動期で、しかも日本の中心部の大変広い地域の中を、

函館だったいろいろな場所が登場しますが、今の

ようにテレビのニュースで放送してくれるわけでもなく、携帯電話できょう函館でこんなのがあったよという時代でもなく、そういう空気を清水にいて、次郎長とかここにいた人たちはそれをどうやって感じて、どうやって反応していたんですか。

小和田 私は次郎長が拠点としていたものは東海道の中の一つの宿場としての、宿場の方は江尻ですけれども、それと港としての清水港、ですからその海の道、陸の道、その二つの接点がまさに今の清水だと思うので、そういったところというのは情報が入りやすいところなんです。

秋岡 もう一つの「なぜ」なんですが、山本先生がお書きになられた小説のNHKのドラマ化も、大変高い視聴率をとっております。もう次郎長亡くなってから百年以上たちますが、なぜ今でも私たちは次郎長の講談を聞くと胸がすかっとするものがあります。どうして私たちは次郎長が死んで百年もたっているのに、やっぱり次郎長に魅力を感じるんだろう、ぜひ馬琴師匠と山本先生からお答えをちょうだいしてみたいと思います。

宝井 何というんですかね、先ほどから出ておりました地のりと言おうか、交通のよさとか、三国一の名山の富士山があるとか、三保の松原がどう、伊豆がどうと、いろんなことにおいて、ほかの旅客に比べると、こんなに気候温暖にして、しかもこの土地は人の心卑しからず、気候温暖にして人心卑しからず、これがかなりのジャンプ力になったのではないかなと思っています。

例えば山梨県の黒駒の勝蔵。黒駒の勝蔵というのは、富士山を挟んで向こう側とこっちで、たしか子母澤寛が『富嶽二景』といういい小説を残しました。これも結局は次郎長の陰に隠れてだめですね。

それからまた大前田英五郎にしても、これも群馬県だけなんです。喜んでおるのは福田康夫

さんだけなんです。

それから小金井小次郎というのは、これは東京都の小金井です。これもまたどこへ出るにも清水のようなわけにはいきません。

ですからその後において、日柳燕石というのはこれは四国の金毘羅さんの方なんです。これもただ四国を行ったり来たりするだけのことで、全国版というわけにはいきません。

だからそういう点で、やはり気候温暖にして人心卑しからずということが大変プラスになって、人をつくって、そして嬌名をあれだけになったというような感じがいたします。

山本 明治の生まれの方で、昔の国鉄の総裁の石田礼助さんとおっしゃる方がいる。これは私は昭和二十三年生まれで、高校を卒業して社会に出ましたので、十八で社会人になったのが昭和四十一年、このときには石田礼助さんは国鉄の総裁だったんです。

石田さんが残された言葉を先輩作家であります城山三郎さんが、『粗にして野だが卑ではない』という小説を書いておられる。卑というのは卑しいということです。粗でも野でもいい。人は粗野ということをいろんな意味で使いますが、石田礼助さんの考える人間のあり方、骨太さというのは、卑しいかどうかということがものすごい大事な判断基準であった。もっと言えばその一つに尽きるんじゃないかと思えます。

言われてみれば、もうこの何日か報道で言われているあの防衛庁の前の事務次官、何をやったか。夫婦でややこしいことをやっている。何百

万もらったの、ゴルフがどうだのと、いろんなことを言っています。自分が国の防人であろうと考えて入った省の中で、国を食い物にしてどうする。そういうものを石田礼助さんはやつちやいかん、卑しいことはだめだとはつきり言い切っておられる。

次郎長さんがどうであったかというのは、一緒に生きていたわけではありませんからわからない。でもものすごく私が今、村松さんが言っておられた清水自慢を伺いながら、他人に思えないのは、考えてみたら私の生まれた高知は黒潮でつながっているんです。で、「黒潮つながり」という言葉、本当にあるんです。だからカツオの角煮に至っては、もう私だって一言言いたい。

ただ、何よりもびっくりしたのがイルカ。これは去年でしたか、番組でこちら出身の春風亭昇太さんと御一緒になったときに、昇太さんの話を聞いて、もう本当に飛び上がったのは、彼はイルカが全国区の食い物だと思つて、東京で暮らし始めたときにスーパーに行つて「イルカがないか？」と聞いたら、「うちで聞いてどうするんだ、水族館行け」と言われて、イルカが食い物なんていう国に住んでいることをわかつてもらえなかった。

でもあのときの昇太さんが、それで三陸の方に番組のロケに行つて、後ろにいっぱいイルカが並んでいる前で、こうして現地から番組のレポートをしようとしたんだそうです。そしたらカメラの人があわてて、その地元の人が、「いやちよっとまずい、後ろにイルカが写っていてまずい」と言

われて、昇太さん、「いや、私は清水の生まれだから」と言ったら、その三陸の人がもう破顔一笑して、「ああよかった、これみんな清水へ行くんだ」。で、一気に仲良くなったというのをすごいうれしそうに言ったんです。きつと次郎長さんの時代から、イルカはうまい食い物だったんですね。もうそうに決まっている。

村松 僕もね、そこすごく興味あるんですよ。次郎長はイルカを食べたのかどうか。ところが次郎長って何がちそうかと言ったら、「ごはん」と言ったらしいからね。

山本 あのアメリカなんていうのは、先ほどの竹内さんのお話じゃないんだけど、あの嘉永六年に日本に黒船が来たとき、あいつら何のために寄ったかと言ったら、捕鯨船の給油でしょう、あれ。

もう薪をどうの、石炭をどうのしたくて日本に寄つていて、さんざつばら鯨を採りまくっているがら、あの『白鯨』なんかの小説まで書いていながら、今になって鯨は見るものだなんてね、もう大きなお世話だという（拍手）、それは別に、だから次郎長さんが先ほどの小和田さんのお話のように、外交官だったら、その辺も一席ぶつてくれたんでしょけども、で質問の答えになります、なぜ次郎長さんが今でも人気があるか。そんなのわかりきってる。

これはやっぱり次郎長さんも非常に人気がある素質があります。これ馬琴師匠が言われたように、卑しくないということが根っこにある。でもあの次郎長さんを固める子分たち、やっぱり周りがよかったです。

黒駒勝蔵と次郎長のすれ違い

秋岡 黒潮つながりということで、大変楽しくまとめいただきました。

この次郎長フォーラムの方も、最後の質問をパネリストの先生方にさせていただきたいと思います。本日の次郎長フォーラム、次郎長翁を知る会創立十五年記念ということで開催をしております。

この次郎長翁を知る会、また来年は十六年、十七年、そして二十年、五十年、百年とこの後続いていくことと思いますが、きょう御出席のパネリストの皆様から、この次郎長翁を知る会へのエールの言葉を、おひと方一分ぐらいずつでいただきます。竹内宏さんはこの会の会長でもいらっしやいますので、最後に今後の抱負も含めて締めていただければと思います。

山本 百二十回忌と生誕二百年というのがこの後へ控えている。そういう一人の人間を寄つてたかってみんなであわあ言っていけるとするのは私の土佐にも例えば坂本龍馬という人がいますけ



竹内 宏氏

ども、これは龍馬に対してはそれぞれいろんな言い方がありますが、この次郎長さんにみんなが熱い思いを抱いて、こうして足元の悪い中、みんながわあわあ集まってくるというのを触れるにつけ、今度高知へ帰ったら「龍馬しつかりせい」と言つて、わあわあ言つてきます。(拍手)

村松 次郎長の意味については、これから磨き上げていっていただくんでしょうけれども、物の価値で、物書きとしての感覚もあるんですけども、一番軽んじられるというか、通過されちゃうのが軽さとか、ユーモアとか、すがすがしさとか、明るさなんですね。こういうものは何か質の問題につながりにくいようなふうに言われる。

次郎長の娯楽部分の広沢虎造の浪花節なんかもその浪花節の世界では割と軽く見られているわけですね。でもその軽いゆえに全国制覇を成し遂げているわけです。だからその軽さというものの力というのはいすごいものがあると思うんですね。

ですから人間が年とつていくと、多分だんだんいかめしく、重く、それからお説教くさく、美談に陥るようになってくるわけですね。だけど、歴史上の人物もやっぱり磨いていくと、何かともすれば美談とお説教、重さ、いかめしさの世界になりがちなので、そこはそういう意味が強くあるんですけど、ぜひそのユーモアというものの持っている、明るさというものの持っているものすごいエネルギーですね。人から見て次郎長物というの

が、ふわっとすがすがしく明るく見えるという、そのこと自体に漂っているエネルギーですね。こういうものの力をちよつと幾つかこれからも数え上げていただきたいと思います。

私も学の世界でもないし、演説の世界でもないんですけども、何となく時折頭の中に次郎長、清水ということをもっと思い出すタイプなんです。ね。例えば島田に仕事に行つて、川止めで潤った町ですから、一番長く川止めがあったのはいつなんですかと聞きましたら、慶応四年の三月二十八日からの二十八日間だと言うんですね。

そこへタブるのかダブらないのか、官軍に入つた黒駒の勝蔵が馬に乗つてやつてくるわけですね。そして次郎長は沿岸の警護に当たっているわけですね。これのニアミスなんているのが、一体あつたのかどうかなんていうことを、これはものすごい時系列といつても、年表をあてはめたぐらいじゃ出てこないんですけれども、そうすると、その島田の川止めみたいなことに關しても、慶応四年というのは一月から八月までは江戸なんですよね。九月からは明治になっちゃいます。

そういう時代の分岐点の中で、あの黒駒の勝蔵と次郎長がすばつとすれ違つて、何かマツチの軸と箱がすつと擦れ合つて、そこにバツと炎が出るような感じですれ違っているわけですね。ですから、それが川止めにどう関わるかなんていうことをずっと考えている。つまり川止めみたいなことを考えても、それに次郎長がどう関わるかというのを考えるくせがついちゃっているんですね。ですからぜひ私なんかも興味を持って見させて

いただきますから、汲めども尽きぬ器だと思ひますので、どんどん汲んでいただきたい。(拍手)

宝井 三百本以上の次郎長関係の映画あり、それからまた小説も村松さんのおじいさんから、また山本さんから初めとして、大変な数がございます。しかし、やはり天田愚庵から、またとにかく神田伯山という人が、あらゆるものの広がる礎を築いたのは講談の神田伯山でございますから、(拍手)小和田 最近歴史学の世界でも、いわゆる江戸時代の俠客を研究テーマとする国定忠治であるとか、そういう形で研究が少しずつ進んできたんですね。今までどちらかというと、歴史学の世界では「ええ、やくざ?それはちよつと」というような感じで、なかなか新味が入らないというか、そういう側面があったんですけれども、これからはかなり資料的にもいろいろとまだまだ発掘されるでしょうし、今回も実は私のゼミの学生で、もう三十年以上静大の教育学部で教鞭とっているんですが、卒業論文で清水次郎長をやろうというのが初めて出てきましたね、これからまだまだ頑張れる、そういう研究対象でもあるかなという感じがして



秋岡 榮子 氏

おります。ぜひ知る会、頑張つてほしいと思います。(拍手)

秋岡 それでは最後に次郎長翁を知る会、竹内会長一言お願いいたします。

竹内 どうもありがとうございます。パネラーの皆さんもありがとうございます。それから山本さんも小説ありがとうございます。それから村松さんも、それから杉山公一さんの姉さんは、僕は小学校の同級生でえらい美人ですけれども、この人が子母澤寛の息子さんに嫁に行っているんですね。だから非常に広い意味で次郎長の関係者がそろわれているわけがあります。

今みたいな転換期になりますと、次郎長は非常に重要ですから、掘り返して、世界的なスケールから掘り返していく。先ほど秋岡さんがちよつと触れましたけれども、素人が活躍するんですね、転換期ですと。経済学で恐縮ですが、経済学の開祖ケネーという男は外科の医者であります。アダムスミスという男は倫理学の先生であります。マルクスは法哲学の専門家であります。ですからアマが活躍するので、まさに次郎長はそのようなアマの活躍する時代に生まれて、我々も世界的な視野からこれから検討し、方々に実際の調査に行きたいなというふうに思っているわけでありまして。実は私、江尻出身ですから、江尻は清水町に吸収合併されて、清水というのは何となく嫌いだったんですけれども、広い心を持って次郎長でございます。それからさらに次は広い心を持って黒駒の勝蔵とも統一して考えたいなと、だんだん視野を広げていきたいと思います。

編集室から

●お待たせしました。「次郎長フォーラム特集号」をお届けします。本会発足十五周年を記念して平成十九年十二月三日、清水テルサで開かれたフォーラムは、広い会場を埋め尽くす盛況。

●清水の生んだ直木賞作家村松友視さんに加えて、竜馬と故郷を同じくする直木賞作家山本一力さん。地元出身大御所馬琴師匠、歴史考証第一人者小和田静大教授、清水生れ清水育ちの路地裏先生こと竹内次郎長翁を知る会会長。次郎長を語らせてはこれ以上ないと万人が認める顔ぶれが揃いました。

●中でも満場の瞳目を引いたのは、コーディネートをつとめた秋岡榮子さん。彼女は知る人ぞ知る竹内学校出身の関秀エッセイスト。巧みなリードでフォーアを引き込み、パネルディスカッションを大いに盛りあげました。

●この特集号は今までにはない十六頁建。それでも二時間に及ぶ内容のすべてを紹介し尽くすことはできませんでした。増頁で嵩んだ制作費は、いつもながら清水財界各企業による熱い支援により賄うことができました。心からお礼を申し上げます。

●桜花爛漫とともに新しい年度が始まります。次郎長史跡探訪ツアー、今年の春は、伊勢市神社港(かみやしろう)訪問を予定しております。四月二十日を予定していましたが、六月に変更となり、現地の都合で調整中、追ってお知らせできると思います。